熊の木本線
男たちのかいた絵

筒井康隆全集 16

男たちのかいた絵
熊の木本線

新潮社

男たちのかいた絵・熊の木本線

筒井康隆全集　第16巻

昭和五十九年七月二十日　印刷
昭和五十九年七月二十五日　発行

定価一五〇〇円

著者　筒井康隆

発行者　佐藤亮一

発行所　株式会社　新潮社

東京都新宿区矢来町七一（〒一六二）
電話　業務部　東京（〇三）二六六一五一一一
編集部　東京（〇三）二六六一五四一一
振替　東京四―八〇八番

印刷　大日本印刷株式会社
製本　加藤製本株式会社

乱丁・落丁本は、御面倒ですが小社通信係宛御送付下さい。送料小社負担にてお取替えいたします。

© Yasutaka Tsutsui 1984 Printed in Japan

ISBN4-10-644416-X C0393

筒井康隆全集第十六巻・目次

短篇連作

男たちのかいた絵……7

短篇

犬の町……119
熊の木本線……127
YAH!……140
生きている脳……150
モダン・シュニッツラー……156
如菩薩団……167
その情報は暗号……179
佇むひと……184
ジャップ鳥……194
「蝶」の硫黄島……203
さなぎ……213
旗色不鮮明……226
ウィークエンド・シャッフル……237
弁天さま……267
五郎八航空……276
喪失の日……290

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

エッセイ

クレー射撃……307
サム・スペード……308
豊田有恒のこと……309
噫婦人之世界……311
大日本悪人党を待望する……314
私の泣きどころ……321
新釈東西いろはかるた……323
嘘と法螺……343
酒嫌いの新人類……345
忘れかけていた故郷……347
現代SFの特質とは……353

解説

助川徳是 362

男たちのかいた絵・熊の木本線

装幀　山藤章二

短篇連作　男たちのかいた絵

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

夜も昼も

縞田が入っていった時、沢半組の事務所にはもう伊勢しかいなかった。事務所といっても、そこは組長沢村半四郎の自宅であり、三畳の玄関の間と、それに続く六畳の、組員たちの溜り場が事務所と称されているだけである。

「遅かったじゃないか」兄貴分の伊勢が、六畳の間に置かれたいくつかの菓子折から顔をあげ、縞田に咎めるような眼を向けた。それから縞田の姿をじろじろと眺めまわした。

「うん」縞田は顔を赤くして俯向いた。人からじろじろ見られるとすぐ顔を赤らめるのが、自慰をはじめた中学二年の頃からの、彼自身ではどうにもならぬ反応だった。

そんな時彼は、つい右の掌を鼻さきにあてて、くんくんと臭いを嗅いでしまうのだ。その部分はいつも、特に強く精液の臭いがするように思えた。自分にさえそう思えるのだから、他人にはきっと、自分のからだ全体から立ちのぼっているあの青くさい臭気がはっきりわかるにちがいない、そう思うたび、彼の顔はまたひとりでに赤くなった。

床の間の前の菓子折は、右から順に千円、二千円、三千円、四千円と、金額によって分けて置かれている。

「他の連中はみんな、もう挨拶まわりに行ったぞ」伊勢はそういって、千円の菓子折と、四千円の菓子折をひとつずつ縞田の前へ置いた。「茜町の方へ行ってくれ。千円の方が、和泉洋装店の若旦那、四千円の方が松本商会の大将だ」

「わかりました」縞田は褐炭色の風呂敷に菓子折をひとつずつ包み、事務所を出た。

和風の大きな邸が並んだその一画を出るとすぐ、大通りのバス停である。縞田は茜町方面行きのワンマン・バスに乗った。茜町はふたつ目の停留所で、そこから先の明神町、丸弥町などは、沢半組と仲の悪い鳴戸会の縄張りになっていた。

和泉洋装店は茜町バス停の前にあるが、縞田は先に松本商会へ行くことにした。そっちへ渡す菓子折の方が大きいからである。

松本商会は狭い路地に面しているが店の間口は広く、道路にまではみ出して商品の扇風機や掃除機が並べられている。親爺はいちばん奥の、カラーテレビやステレオが置かれている前で客と立ち話をしていた。

「やあ。どうも」

縞田が近づいていって笑いかけた時、小柄で顔色の青い親爺は一瞬露骨に迷惑そうな表情を見せ、すぐにあわてて

それを隠そうとした。
中年の客が縞田を見て眉を少しだけひそめた。「それじゃ、また」親爺にうなずきかけて、客は店を出て行った。
「今夜、賭場を開きますので、お知らせにきました」縞田はさっそく、親爺にそういって菓子折を風呂敷ごと渡した。
「ご挨拶のしるしに」
菓子折の大きさを見て、親爺の頬が怯えにふるえた。彼は縞田が小脇にかかえている小さな風呂敷包みをちらと見てから、受けとった菓子折の大きさを目測した。さらにもう一度両方を見比べてから、ぼそぼそとつぶやくようにいった。「それはどうも、いつもご丁寧に」ちょっと頭をさげ、救いを求めるように眼球だけを動かして彼は周囲を見た。
誰かに誘われて、いちど沢半組の賭場にやってきた堅気の客には、その次の開帳を、千円の菓子折持参で知らせに行くことになっていた。もし来なかった場合、次は二千円の菓子折を持って挨拶に行く。それでも来なければ三千円、その次は四千円という具合に、品物の大きさと金額を際限なくエスカレートさせて行く。五千円になると、そんな大きな菓子折は作れないので別の品物になる。一万円以上の品物になると、縞田のようなちんぴらではなく、幹部級の組員が持って挨拶にやってくるのだ。相手はだんだん気味悪くなってきて、ついにはいやいやながら賭場へやってくるという寸法である。
松本商会の親爺が賭場へ来たがらないのは最初来た時に二、三十万円負けているからだった。無論いんちき賭博だから負けるのがあたり前なのである。堅気の客から金を巻きあげてこそ組員たちが食っていけるのである。
「今夜は木更津という旅館でやります。場所を知っていますか」縞田は親爺の怯えぶりを細めた眼で観察しながらそういった。
「今夜ねえ」親爺は口ごもりながら答えた。「今夜はちょっと、寄りあいがあってね」
また来ないつもりだな、と、縞田は判断した。「まあまあ。場所ぐらいは一応、知っておいてくださいよ」
低い声でそういうと、親爺は顔を伏せた。縞田のさりげない脅しが、気の弱い親爺にはびんびんと応えているのだ。縞田の陰茎が、こころもち勃起した。縞田は親爺に木更津旅館への道を教えながら、ズボンのポケットに右手を突っこんで陰茎をゆっくりとしごきはじめた。彼のズボンのポケットは、陰茎を素手で握りしめるために底を破いてあった。
縞田が賭場への道を喋り終えると、親爺はうなずいてからもう一度、細い声でつぶやいた。
「でも、今夜はどうせ、同業者の寄りあいがあるから」
その寄りあいは何時に終るのだ、まさか一時や二時まで

やるわけではなかろう、賭場は朝がたまでやっているんだぜ、そういってやろうかとも思ったが、堅気の連中をそこまで怯えさせることは固く戒められていた。

「そりゃあ残念ですね。それじゃまあ、気が向けば来てやっておくんなさい」

縞田はそう言い捨てて店を出た。陰茎はまだ膨脹していて、鬱血した亀頭がズボンの裏地に擦れて痛いため、ポケットに突っこんだ右手でその部分を握ったまま歩かなければならなかった。

和泉洋装店はその近所でいちばん高級な婦人既製服や洋品雑貨を扱っている店で、街かどにある上ショー・ウィンドウが大きく、だから店内は明るかった。若主人の和泉は店にいなかった。中学を卒業したばかりらしい少年の店員が、隣りの喫茶店でもう一時間以上も和泉が友人と話しこんでいることを縞田に話した。縞田は右隣りにある『モロッコ』という喫茶店に入っていった。

和泉と話していたのは彼の同窓生らしく、ふたりの会話には変てこな呼び名や渾名がいっぱい混っていた。和泉に会釈してから縞田は隣席に腰をおろし、コーヒーを飲みながらふたりの話をぼんやりと聞いた。和泉に同窓生の友人がいることを、縞田は特に羨ましいとは思わなかった。彼は今、怒張したままの自分の陰茎をもてあましていたのだ。

和泉は縞田がやってきても迷惑そうな表情は見せなかった。むしろ縞田のような人間と知りあいであることを、友人に誇っている様子だった。こういう素人は、はっきり口止めしておかない限り、賭場のことをべらべら人に喋ってしまうおそれがある。

自信に満ちあふれ、高慢な口調で喋り続けている和泉のぶよぶよとうだ腫れた顔を見ながら縞田は、こういう世間知らずを死ぬほど脅しつけてやったらどんな反応を示すだろうかと考えた。この若僧のような我の強いインテリほど、ちょっと凄んでやっただけで気絶するほど怯えるにちがいないと思い、その時の和泉の様子、声、表情を想像し、縞田はふたたびズボンの中で陰茎を強くしごきはじめた。亀頭の先端が湿りはじめていた。

和泉の友人が帰っていった。縞田は和泉の前の椅子に移り、菓子折を渡した。右手がポケットから出せないため、左手で風呂敷包みを和泉の前に押しやった。

「今夜また、賭場を開きますので」

「あ。今夜は行けないんだ。今の話聞いていたろ。おれ同窓会の幹事なんだ」

聞いてはいなかったが、本当のようだったので、縞田は賭場を教えなかった。

和泉は細くした眼を縞田に向け、秘密を共有する者同士の馴れなれしい口調で訊ねた。「今夜もまた、バッタマキかい」

「そうです」
「壺振りはやらないの」
「丁半はやりません」知ったかぶりしやがって、と、縞田は思った。
和泉はぬけぬけと訊ねた。「で、賭場はどこだい」平気な顔でタバコを出し、口に銜えた。
「じゃ、ごめんなさい」縞田はすぐにそう言い捨てて立ちあがり、自分の伝票だけを掴むと、振り返りもせず人口の方へ歩き出した。
あ、という顔で自分を見送っているであろう和泉の視線を背に感じながら、彼は『モロッコ』を出た。カウパー腺液で右掌がねとねとしていた。帰りのバスに乗っている間に、なんとか鬱血をおさめなければならない、と彼は思った。だが、事務所に戻ってくるまで海綿体の腫れはひかなかった。
六畳の間には、伊勢の他に四人の若い組員がいて、なんとなく殺気立っていた。
「何かありましたか」縞田は伊勢に訊ねた。
伊勢はじろりと縞田に横目を使ってから、早口に喋り出した。「今夜、鳴戸会の殴り込みがあるかもしれん。さっき賭場の近くで、工藤たちが乾を掴まえた」
「はあ」縞田はうなずき、壁ぎわにあぐらをかいた。
乾というのは鳴戸会の幹部のひとりである。賭場の近くで掴まったというからには、警察へ密告するつもりで場所をさぐりにきたと考えることもできた。
ふつう、組同士で密告みあいをしたりすれば、両方共痩せ細って共倒れになるのが落ちだが、最近の沢半組と鳴戸会の仲の悪さはそんな汚い泥試合にまで発展していたのである。
乾を取り戻すため、鳴戸会が殴り込みをかけてくるだろうということも充分想像できた。こちらが乾を捕えておくかぎり、あっちが警察へ密告することはできないのだからな、と、縞田は考えた。だから少なくとも警察の手入れの心配はないだろう、彼はそう思った。
だが、恐ろしいのは警察の手入れよりも殴り込みの方であることを縞田は思い出した。手入れで命を失ったという話はまだ聞いたことがない。しかし、賭場への殴り込みで死人や怪我人の出ないわけがなかった。
殴り込みがあれば、おれは死ぬかもしれんぞ、縞田はそう思った。拳銃を持っているのは組長はじめ幹部連中だけである。縞田たちには脇差さえあたえられない。
日本刀でばっさり斬られて、今夜あたり死ぬことになるかもしれんな、そう考えるなり背筋にぞくぞくと恍惚感が走り、彼はずっと勃起したままだった陰茎を、またもてあそびはじめた。壁に凭れ、眼をうつろにし、縞田は自分の死ぬ様子をあれこれと想像しながら次第に深く自慰へ没入

していった。

「あ。こいつ、また、マス掻いてやがる」

縞田の前に立った多見山が、彼のズボンの膨らみとその上下運動に気づいて、眼を丸くしながらそういった。他の連中はいっせいに薄笑いを浮かべ、すぐにそっぽを向いた。多見山だけがいつまでも縞田の前に立ちはだかり、顔をしかめ、汚物を見る眼で彼を見おろしていた。

一瞬、顔を赤らめてもじもじし、手の動きをとめた縞田は、やがて顔色をもとの蒼白さに戻した。それからゆっくりと怒りの眼を多見山に向けた。恥をかかされたための怒りではなく、享楽を中断させられたための怒りだった。彼の眼の鋭さにどぎまぎし、多見山はすぐ顔をそむけて玄関の間に去った。

縞田は誰も見ていないのを確かめてから、左手でハンカチを出し、右掌にねっとりと付着したカウパー腺液を拭った。射精はしなかったが、気分を壊されたために陰茎は小さくなっていた。

「さあ。そろそろ現場の方へ出かけるか」伊勢がそういった。「他の連中はもう先に行って準備してるんだ。縞田、お前この風呂敷包み持ってきてくれ。多見山、お前は残ってくれ。そして、こっちに見えた客人を、木更津旅館の方に案内してきてくれ」

「わかりました」

縞田の持たされた白っぽい風呂敷包みは、細長く、重かった。脇差が入っているのかなと、縞田は想像した。

木更津旅館は事務所から約一丁離れた裏通りの、小さな和風旅館である。縞田たちが着いた時にはもうだいぶ暗くなっていて旅館の窓には明りが点き、近くの街頭には組員たちが見張りに立っていた。見張りの人数はいつもより多かった。おれも見張りに立たされるだろう、と縞田は思った。彼はいつも見張り役か、あるいは門の前に立って、やってきた客を奥へ案内する役だった。

賭場は旅館の一階の奥の間三部屋をぶち抜いて設けられていた。その夜、沢半組は一階を全部借り切っていた。二階はふつうの宿泊客があった時のために空けてあるが、変な連中がうろうろしているため、泊りにくる客はひとりもいない。

伊勢が縞田から風呂敷包みをとりあげ、奥の間へ持っていった。縞田たちには玄関に近い一室で旅館の夕食が出た。料理は不味く、量も少なかったが、縞田は満腹した。酒も出たが、縞田は飲むふりだけをした。彼は一滴も飲めなかったのだ。

「お前たちは玄関の前で見張りだ。客人が見えたら丁重に奥へご案内する。わかったな」奥から戻ってきた伊勢がそういって、肩をゆすりながらまた部屋を出て行った。なぜか、ひどく張り切っていた。

「兄貴は、乾の見張りをやるんだよ」と、ひとりがいった。
「乾はどうしてあるんだ」
「布団部屋へ押しこめてあるらしいな。今は幹部の誰かが口を割らせようとしてるんだろう」
縞田はまた、背後の床柱に凭れてズボンのポケットに右手を入れた。彼はいつも、わざと流行遅れのだぶだぶのズボンを穿いているのだが、陰茎が急激に勃起すると、やはりあちこちに擦れて気持が悪い。
どんな風に折檻されているのだろうと想像し、乾の顔を思い浮かべようとしたが、うまくいかなかった。乾をよく知らないのだ。
ゆっくりと陰茎をしごき続けている時、ひとりが立ちあがった。
「さあ、行こうか」
縞田たちは門の付近に立った。星がなく、あたりは暗い。幹部数人に囲まれて、組長がやってきた。沢村半四郎という、まるで役者のような名前だが、本人はすでに初老で、鼻が醜く潰れたいがぐり頭の小男である。縞田たちの挨拶に会釈も返さず、彼は憂鬱そうな表情で奥の間へ入っていった。初老期の鬱病ででもあるのだろうと縞田には思えた。
四つ辻の見張りがタバコの火を振った。縞田たちは門の中に入り、黒塀の裏側に身をひそめた。靴音が近づいてきて、通り過ぎていった。巡回の警官で、まだ若かった。
「イモだ」と、誰かがいった。
やがて、ちらりほらりと客がやってきた。縞田たちは交代で彼らを奥へ案内した。
多見山が意気揚揚と数人の客を案内してきたのをきっかけに、奥の間では賭博がはじまった様子だった。縞田たちは少し緊張した。
殴り込みがあるとすればいつごろだろう、と、縞田は考えた。他の連中のように酒を飲んではいないため、夜風がうそ寒い。彼は両手をズボンのポケットに突っこみ、肩をすくめていた。右ポケットの底が破れているからどうしても陰茎を素手で握ることになる。彼はまた、自分が殺されている悲痛なシーンを思い浮かべた。
いつもだと、見張りをしながら自慰に耽り射精をすると、そのあと寒さがひどくこたえる。発汗し、それが蒸発して冷えるためであろう。しかし今日は昼間からまだ一度も射精していないため、気分が暗鬱だった。少し暖かくなってきている筈だから、以前ほど寒くはあるまい、そう思い、縞田は陰茎をしごきはじめた。たちまち右手が粘液にまみれた。脊髄に寂寞感がしのびこんだ。縞田は少し前屈みになった。風が彼のながい頭髪を、彼の蒼白い頬にへばりつけた。
あるいは弾丸にあたって死ぬかもしれないぞ、縞田は断末魔の絶叫を吐いてのけぞっている自分の姿を、閉じた瞼

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.